

IIAS「ゲーテの会」ブックレット  
(VOL. 01040)

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて  
ー日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追うー  
日本社会の古層から日本的なるものを発掘した人物

(芸術・音楽分野)

## 西條八十と昭和時代（下）

公益財団法人国際高等研究所  
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2016年10月17日開催の第40回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・転写を禁じます。ただし、個人としての利用の範囲内であれば、コピーして利用いただけます。

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて  
—日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う—  
日本社会の古層から日本的なるものを発掘した人物

## 西條八十と昭和時代（下）

西條八十は 1892(明治 25)年に生まれ 1970(昭和 45)年に亡くなった詩人・童謡作家・作詞家・文学研究者(早稲田大学仏文科教授)である。最初詩人として出発したが、大正中期以降北原白秋・野口雨情とともに三大童謡作家の一人となった。昭和に入ると、『東京音頭』『誰か故郷を想はざる』『蘇州夜曲』『若鷺の歌』『同期の桜』『青い山脈』『越後獅子の唄』『この世の花』『王将』、『花咲く乙女たち』と戦前から戦中を経て高度経済成長期に至るまで多くの愛唱歌を作り、昭和の日本人を慰め励まし続けた。そして、その原点は、『神楽歌』『梁塵秘抄』『閑吟集』『山家鳥虫歌』とつながる『日本歌謡集成』にあった。こうした「日本の庶民に寄り添った知識人」西條八十の生涯を振り返り、その意味を考えてみたいと思う。今回は後篇として昭和戦中期から死去までを扱う。

### 筒井 清忠 (Kiyotada TSUTSUI)

1948 大分県生まれ。帝京大学文学部長・大学院文学研究科長。東京財団上席研究員。専門は日本近現代史。

著書に、青木保・山折哲雄・川本三郎・御厨貴共編『近代日本文化論(全 11 巻)』(岩波書店, 1999-2000)、編『西條八十と昭和の時代』(ウェッジ選書 2005)、『西條八十』(中公文庫 2008)、

『時代劇映画の思想——ノスタルジーのゆくえ』(ウェッジ文庫 2008 年)、『日本型「教養」の運命』(岩波現代文庫 2009)、『近



衛文麿』(岩波現代文庫 2009)、『帝都復興の時代—関東大震災以後』(中公選書 2011)、『昭和戦前期の政党政治』(ちくま新書 2012)、川本三郎共著『日本映画 隠れた名作 - 昭和 30 年代前後』(中公選書, 2014)、『満州事変はなぜ起きたのか』(中公選書 2015)、編『昭和史講義 最新研究で見る戦争への道』(ちくま新書 2015)、編『昭和史講義 2 専門研究者の見る戦争への道』(ちくま新書 2016)、『陸軍士官学校事件 二・二六事件の原点』(中公選書, 2016)などがある。『西條八十』で第 57 回読売文学賞(評論・伝記部門)、第 14 回山本七平賞特別賞、第 29 回日本児童文学学会特別賞受賞(2005,2006)。

## 目次

(第 36 回から続く)

はじめに

### VII 日中戦争下の抒情性

- (3) 『誰か故郷を思わざる』
- (4) 『蘇州夜曲』

### VIII 太平洋戦争を迎えて

- (1) 『若鷺の歌』
- (2) 『同期の桜』

### IX 「復興」と「民主化」の歌

- (1) 『青い山脈』
- (2) 『越後獅子の唄』
- (3) 『芸者ワルツ』

### X 戦後の「小春日和」から高度成長の時代へ

- (1) 『王将』

### XI 西條八十の示すもの

質疑応答

2016年10月17日開催

第40回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：西條八十と昭和時代（下）

講演者：筒井 清忠（帝京大学文学部長・大学院文学研究科長、東京財団上席研究員）

（第36回から続く）

はじめに

（文中敬称略）

前回6月に西條八十についての前編を話したので、本日は後編になる。前回は昭和14年まで紹介したので、昭和15年から西條八十が亡くなる昭和45年(1970年)までを話したいと思う。

西條八十は非常に抒情性を大事にした人であり、それで大正期から昭和初期までは日本人の胸に迫るものがあったので人気があったが、日中戦争以降、段々と戦争が深まっていくにつれて、世の中は特に女性向きの抒情的な歌を作っていた西條八十と若干合わないような感じになっていく。その辺りから話したいと思う。

## VII 日中戦争下の抒情性

### （3）『誰か故郷を想わざる』

昭和15年に西條八十が作った歌で大変ヒットしたのが、『誰か故郷を想わざる』という歌である。当時、日中戦争が起きて、戦地に行っていた日本人や、満州が満州国になって、そこに行っていた人たちなど、「戦争は嫌だから、早く日本に帰りたい」という気持ちを持っていた人たちの心に、この歌は響いたようだった。そのため、むしろ日本国内ではなく、特に中国大陸にいた日本人がこの歌を歌い、中国大陸に慰問に行った歌手たちが、「中国や満州で流行っている」とこの歌を日本国内で広めて、日本国内でも歌われるようになったという、そういう曲である。西條八十といつも組んで作曲していた古賀政男が作った。

同じ昭和15年には宮沢賢治の『風の又三郎』が映画化されたが、宮沢賢

#### 『誰か故郷を想はざる』

花摘む野辺に日は落ちて  
みんなで肩を くみながら  
唄をうたつた帰りみち  
幼馴染のあの友 この友  
ああ、誰か故郷を想はざる。

ひとりの姉が嫁ぐ夜に  
小川の岸で さみしさに  
泣いた涙のなつかしさ  
幼馴染あの山 この山  
ああ、誰か故郷を想はざる。

都に雨のふる夜は  
涙に胸も しめりがち  
とほく呼ぶのは誰の声  
幼馴染あの夢 この夢  
ああ、誰か故郷を想はざる。

（『西條八十全集 第九巻』）

治も亡くなったときはほとんど無名で、この映画が全国で上映されて、現在のようなイメージになった人である。

西條八十は『誰か故郷を想わざる』で、戦地の人の「故郷に帰りたい」という思いに重なる歌を作ったわけだが、またこれは、前述のように、姉が結婚したのが非常に寂しくて、小川の岸で泣いたという、西條八十自身が小さい頃に経験した感情をそのまま歌詞にしたものでもある。

#### (4)『蘇州夜曲』

もう一つ、この年に西條八十が作って流行ったのが『蘇州夜曲』という作品である。当時は中国のことを支那と言っていたが、それで『支那の夜』という映画が作られるときに、映画用に書いた作品である。日中戦争中の作品だが、この映画は、日本人の男性が、中国人の女性を「日本人の気持ちを分かっていない」と言って殴る場面が出てくるので、日本の宣伝のための国策映画だと批判された。しかし、それは誤解で、次第に研究されて分かってきたのだが、この映画は当時の軍部の批判を受けていた。検察などから、当時の言葉で「皇軍の兵士が尊い血を流している中国大陸で、中国人の女性と日本人の男性が恋愛なんかしているとは何事だ」と批判された映画だった。当時は七・七禁令と言い、取り締まり側がいろいろな形で流行歌や映画を厳しく取り締まるようになった、そのきっかけとなった映画だったわけだが、戦後、誤解されて国策映画と言われてしまった。本当はそうではない作品である。

服部良一という、戦後に『青い山脈』を作った人が、上海に行って作った作品だが、日本の古くからあるメロディーと、上海で知ったジャズのようなアメリカのメロディーと、それから上海にいることによって知った中国のメロディーと、3つをミックスした曲で、そういう意味では混合文化とも言える作品である。したがって、非常にナショナリズムの強い時代ではあったが、文化状況はミックスされた、特定のイデオロギーだけにとどまらない文化ができていたということがわかる。

太平洋戦争中は、当局によってこの歌を歌うことは禁止された。戦後、今度は占領軍が「真相はこうだ」と、日本軍国主義がいかに悪いことをしたかという放送を毎日 NHK で流すようになり、そのテーマ曲として、占領軍のアメリカ軍人がこの曲を気に入って使ったという、かなり複雑な運命をたどった曲である。これは永遠の名曲だと言う人もあるぐらいで、現在、東南アジアなどではスタンダードナンバーになっているようである。

このように、日本は日中戦争で中国と戦争をしながら、一方ではこういう歌を作っていたわけであり、複雑な思いにさせられる。近代日本で中国語学習者が一番多かったのはこの時



服部良一（1907-1993）  
Public domain,  
via Wikimedia Commons

期であり、言わば、日本が中国と戦争しながら、他方で一番中国への関心が高かった時期とも言える。日本人の男性と中国人の女性が恋愛するような映画を作っていたという、なかなか難しいところがある。

### 『蘇州夜曲』

君がみ胸に 抱かれて聞くは、  
夢の船唄 鳥の歌、  
水の蘇州の 花ちる春を  
惜しむか、柳がすすり泣く。

花をうかべて 流れる水の、  
明日のゆくへは 知らねども、  
こよひ映した ふたりの姿、  
消えてくれるな、いつまでも。

髪に飾るか 接吻しよか、  
君が手折りし 桃の花、  
涙ぐむよな おぼろの月に、  
鐘が鳴ります 寒山寺

(『西條八十全集 第九巻』)

## VIII 太平洋戦争を迎えて

さて、さらに日本と中国の関係が悪化するなかで、アメリカが中国に加担したことによって日米の関係が悪くなり、とうとう日米は戦争に至る。この日米戦争、つまり太平洋戦争が始まって、西條八十の教え子の学生たちも大勢出陣していくことになり、八十はこれを支えるような歌を作ることになる。ただし、あまり流行った曲はない。

### (1) 『若鷺の歌』

2曲だけ流行った曲があるので、それを見ていきたいが、一つは昭和18年に東宝映画『決戦の大空へ』のために作られた『若鷺の歌』という歌である。一般には『予科練の歌』と呼ばれることが多いが、海軍の航空隊が土浦にあって、霞ヶ浦で若い海軍の飛行予科練習生を訓練しており、そこで生徒募集が行われていた。それに西條八十が協力して歌を作り、古関裕而が作曲して大変なヒット曲となった。映画も流行って、歌も日本中で歌われた。戦後も長い間歌われた歌である。

この歌を作った古関裕而は、戦後、朝日新聞社の中等学校野球大会が学制の変化に伴って全国高等学校野球大会に変わると、『栄冠は君に輝く』という、現在も使われている高等学校野球大会の大会歌を作っている。それから、阪神タイガースの球団歌である『六甲おろし』も古関裕而が作っている。このように、古関裕而が作曲した歌は、基本的にスポーツ応援歌という感じが強い。そのため『若鷲の歌』も当時の軍国主義の時代を賛美するような曲ではあるが、何となくスポーツ応援歌的な色彩が強い。そのために戦後も歌われたという面があり、西條八十もそれに協力したような印象が他とは少し違っている。他の軍歌は暗くて極端な死者への賛美が多いが、そういう色彩がないのがこの歌の特色である。



古関裕而 (1909-1989)  
Public domain, 直接  
via Wikimedia Commons

前述のように、昭和 18 年(1943 年)には学徒出陣があり、西條八十の教え子も出陣していくことになる。西條八十自身も茨城県の下館というところに疎開している。それで、例えば『乙女の旅唄』のような、戦争の時代も柔らかかで抒情的な歌を作るようにしたが、軍当局の検閲が厳しく、検閲をかわすのが大変だったので、そういう歌は作り難かった。

### 『若鷲の歌』

若い血潮の「予科練」の  
七つ 釦は 桜に 錨  
けふも 飛ぶ 飛ぶ 霞ヶ浦にや  
でかい希望の 雲が湧く

燃える元気な「予科練」の  
腕はくろがね 心は火玉  
さつと巣立てば 荒海越えて  
行くぞ敵陣 殴り込み

仰ぐ先輩 「予科練」の  
手柄聴くたび 血潮が疼く  
ぐんと練れ練れ 攻撃精神  
大和魂にや 敵は無い

いのち  
生命惜しまぬ 「予科練」の  
意気の翼は 勝利の翼  
見事轟 沈した 敵艦を  
母へ写真で 送りたい

(『西條八十全集 第九巻』)



## (2) 『同期の桜』

そして昭和 19 年頃、日本ではとうとう特攻隊が出ていくことになるが、その特攻基地を中心に歌われ、戦後も長い間、作詞作曲者が分からず、謎の歌と言われていて、結局、西條八十が作詞したと分かったのが『同期の桜』である。

この歌は、先に紹介したとおり、誰が作ったのか長い間分からないまま、戦争中広く歌われ、戦後もまたよく歌われた。それで調べていくうちに、海軍兵学校 71 期生の帖佐裕という人が、自分が日曜ごとに海軍のクラブで聴いているレコードをもとに改作したと言ったので、帖佐裕が作ったと言えるのではないかとも言われたが、やはり元のレコードがあるということで、長い間随分と調べられた。それでも分からないままだったが、東京新聞が、これは『二輪の桜』という西條八十が元々作ったものだと発表し、現在、著作権は西條八十にあるとされている。

しかし、3 番の歌詞にある「仰いだ夕焼け 南の空に 未だ還らぬ 一番機」という一節は元々の西條八十の作品にはない。それでも非常に良い歌詞で、これについて大岡信は歌謡ということを問題にして、短歌や俳句はオリジナリティが大事であり、西洋の近代文学も皆そうだが、歌謡

というものとは違うと言っている。歌謡というのは、民衆自身が元々ある何かを借りて、それを自分の気持ちに合わせて歌うものであり、また時代を経て、人々の気持ちに合わせて作り替えられるなど、そういう形でずっと歌い継がれていくものだというのである。したがって、近代におけるオリジナリティの概念とは違うものが歌謡であって、そういう意味では、西條八十の歌は本当の日本の歌謡というものを生きた作品だと言えるわけである。

そして、昭和 20 年、西條八十は広島にあった航空機生産工場の歌を作るため、8 月に広島へ行くことになっていたが、風邪をひいて寝込んでいるうちに広島に原爆が投下され、そのまま終戦を迎えることになった。また、早稲田大学の先生をしていたが、これもいろいろな反対派の策動もあって辞めることになる。戦後は「戦争に協力したのではないか」と問題視する向きもあったが、歌謡曲の作詞者は大したことはないと判断され、あまり問題にされ

### 『同期の桜』

貴様と俺とは 同期の桜  
おなじ兵学校の 庭に咲く  
咲いた花なら 散るのは覚悟  
みごと散ります 国のため

貴様と俺とは 同期の桜  
同じ兵学校の 庭に咲く  
血肉分けたる 仲ではないが  
なぜか気が合うて 忘〔れ〕られぬ

貴様と俺とは 同期の桜  
おなじ航空隊の 庭に咲く  
仰いだ夕焼け 南の空に  
いまだ還らぬ 一番機

貴様と俺とは 同期の桜  
おなじ航空隊の 庭に咲く  
あれほど誓った その日も待たず  
なぜに死んだか 散ったのか

(古茂田信男ほか編『新版 日本流行歌史 中』)

ずに済んだ。

## IX 「復興」と「民主化」の歌

その後、アメリカ軍の GI が大きな顔をしていると言われていた東京を嫌っていた西條八十は、しばらく茨城県の下館にいた。西條八十は英語もフランス語もできるので、むしろ使われても良かったが、それも断っていた。しかし、妻に早く帰って活躍するように言われ、昭和 22 年に東京に帰ることになった。

### (1) 『青い山脈』

それでまたしばらくは、いかにも西條八十らしい抒情的な曲を作っていたが、昭和 24 年に、それまでのすべてのヒット曲を超す、若い人を中心に広く日本中の人々に歌われた『青い山脈』という曲が登場する。映画も大ヒットしたが、本当によく歌われる曲になった。

2006 年に亡くなった久世光彦は、当時はまだ青年で、後にテレビの人気番組を数多く作った人だが、その人が「私たちは一つの歌で突然立ち上がったのだった。それが『青い山脈』だった」と言っている。戦後のいろいろな歌の中でも、この歌ほど戦後の日本を代表する歌はないと思う。原作は石坂洋次郎が朝日新聞に連載していた小説で、田舎の町で高等学校の若い女教師が高校生と一緒に、当時の言葉で封建的に町を支配していたボスたちを懲らしめて日本を民主化させていくという話である。

当時、映画のストーリーは占領軍がすべてチェックしていたので、民主化を進めるといふ趣旨に合っていなければならなかったこともあるが、「古い上衣よ さやうなら」など、その時代が持っていた雰

囲気にぴたりと合っていた。「雨にぬれてる 焼けあとの」とか、今では考えられない時代

### 『青い山脈』

若くあかるい 歌声に  
なだれ  
雪崩は消える 花も咲く  
青い山脈 雪割 桜  
空のはて  
けふもわれらの 夢を呼ぶ

うほぎ  
古い上衣よ さやうなら  
さみしい夢よ さやうなら

青い山脈 バラ色雲へ  
あこがれの  
旅の乙女に な鳥も啼く

雨にぬれてる 焼けあとの  
名も無い花も ふり仰ぐ  
青い山脈 みねかがやく嶺の  
なつかしき  
見れば涙が またにじむ

父も夢みた 母も見た  
旅路のはての はてその涯の  
青い山脈 みどりの谷へ  
旅をゆく  
若いわれらに 鐘が鳴る

(『西條八十全集 第九巻』)

を現した歌詞で、一気に戦後の日本の民主化は進んでいくという感じをもたらした曲である。しかし、そういうなかでも西條八十は「父も夢みた 母も見た」など、何かしら親の世代と若い世代を結びつけるような歌詞を作っている。そういうところにも大きく包み込む優しさが込められた、非常に良い歌詞だと思う。

この曲は、1980年代頃まで日本人の一番好きな曲についてアンケートをとると1位に上がっていたが、残念ながら今の若い人にはあまり知られていないようである。今の大学生に聞くと、「お祖父ちゃん、お祖母ちゃんが歌っていた」ということでは知っているという感じなので、年配の人は子供やお孫さんに聞かせてあげてほしい。

## (2)『越後獅子の唄』

西條八十は、いろいろな詩人関係の団体役員も務めていたが、そういうなかで『越後獅子の唄』という美空ひばりが歌って大ヒットした曲を作っている。これはとても良い歌で、今でもこの種の歌のベストテンに入る。

これを歌った美空ひばりは、天才少女歌手として出てきたが、基本的に戦前の日本にはなかった存在だった。それが、大変上手いと評判になって、いろいろところで歌ったり、映画ができたりした。ところが、これに対しては強烈な逆風が吹いていた。まだ学校に行かなければならない年齢の女の子が、こんなことをしているとは何事かとPTA等をはじめとして大変な批判があったのである。それで、あまり知識人階級の中で擁護する人が無かったが、西條八十は彼女



美空ひばり (1937-1989)  
写真は1949年『悲しき口笛』  
Public domain,  
via Wikimedia Commons

### 『越後獅子の唄』(第一・二・四聯)

笛にうかれて <sup>さかだ</sup>逆立ちすれば  
山が見えます <sup>ふ</sup>るさとの  
わたしや孤児 <sup>みなしご</sup> <sup>かいだう</sup>街道ぐらし  
ながれ／＼の <sup>あちごしし</sup>越後獅子

今日も今日とて 親方さんに  
芸がまづいと 叱られて  
<sup>ぼち</sup>撥でぶたれて 空見あげれば  
泣いてゐるよな 昼の月

ところ変れど 変らぬものは  
人の情の <sup>なさけ</sup> <sup>そでしぐれ</sup>袖時雨  
ぬれて涙で おさらばさらば  
花に消えゆく 旅の獅子

(『西條八十全集 第九巻』)

を天才的な人だと認め、美空ひばりの映画の主題歌を頼まれたときに、自分が少年の頃、うちの近くに越後獅子が来て踊っていたのを思い出し、裏方たちに虐められ、怖い親方に怯えていた様子が、世間から非難されている美空ひばりと二重写しになったと言っている。したがって、この『越後獅子の唄』の越後獅子はひばり自身のことであり、世間から批判されて怯えている様子を歌にしたのである。

とても良い歌詞で「人の情の袖時雨(しぐれ)」というところがあるが、元来、袖時雨という言葉はないので、これは西條八十の造語である。

### (3) 『芸者ワルツ』

昭和 20 年代の後半になると、朝鮮戦争が起こり、日本も戦後の混乱期から段々と立ち直っていく。そういう状況の中で、西條八十は『芸者ワルツ』という曲を作り、これがまた流行して、当時よく歌われた。そしてまた批判を浴びることになる。

他にも『トンコ節』や『こんな私じゃなかったに』などの歌を次々に作ったが、これらは「お座敷ソング」と呼ばれた。なかでも『芸者ワルツ』が一番ヒットしたわけだが、これは教育上良くないので放送禁止にすべきだという声上がり、結果的に、これら一連の歌はラジオ放送で放送禁止になった。西條八十は、放送禁止は絶対におかしいと思い、熱心に「放送を続けるべきだ」「こういう歌はもっと作ってかまわない」と主張した。

これは西條八十の「日本歌謡の伝統をどう考えるか」というところにつながっていく。西條八十が歌を作るときにいつも参考に使っていたのが、高野辰之編『日本歌謡集成』という本

で、分厚い本が 10 冊近くあり、日本の神楽歌から始まって江戸期まで、すべての歌謡がその中に収められていた。西條八十は暇があるとこれを眺めて、自分の作詞の参考に使っていた。そして、作詞家や歌謡を作ることを目指す人間は、必ずこの本を見ておかなければならないと主張していた。

高野辰之は文部省唱歌「ふるさと」を作った人で、伝記も出ている。この『日本歌謡集成』に入っている日本の歌謡の伝統とはどういうものかということ、1 番目が『神楽歌』、神様に捧げる歌で、神社などで舞われることがある。『催馬楽』は日本の一番古い民謡を集めたもので、地方の歌である。それから、後鳥羽上皇が当時の歌を歌い踊る人と一緒に遊んだりしながら集めたのが『梁塵秘抄』という有名な歌謡集である。『閑吟集』は室町期の歌を集めたもので、この中に歌謡の特徴がよく出ている。「何を真面目臭った顔をしているんだ」「人

#### 『ゲイシャ・ワルツ』(第一・二・四聯)

あなたのリードで 島田もゆるる  
チークダンスの なやましき  
みだれる裾も はずかしうれし  
芸者ワルツは 思い出ワルツ

空には三日月 お座敷帰り  
恋に重たい <sup>まいおうぎ</sup>舞扇  
逢わなきやよかった 今夜のあなた  
これが苦勞の はじめでしょうか

気強くあきらめ 帰した夜は  
更けて涙の 通り雨  
遠く泣いてる <sup>しんないなが</sup>新内流し  
恋の辛さが 身にしみるのよ

(『西條八十全集 第九巻』)



『日本歌謡集成』高野辰之編／東京堂出版（昭和 35～）

生はもっと燃焼し尽くさないとだめだ」という歌詞がたくさん出てくる。『隆達節』の隆達は中国から来た人で、作詞作曲していたシンガーソングライターの元祖のような人である。そして『松の葉』『山家鳥虫歌』『都廻一曲(ひなのひとふし)』これらは全部江戸期の歌謡を集めたもので、『都廻一曲』は菅江真澄という人が北陸から北海道地域の歌を集めたものである。これらの歌詞を全部見ると、非常に強烈な生命の燃焼感が歌われていて、性的なこともたくさん書かれている。

つまり、日本の歌謡の伝統において、歌は、酒を飲んだり楽しいときに強烈に生命を肯定するという方向から歌われてきたものなので、西條八十からすれば『芸者ワルツ』のようなものを作るのは、日本の歌謡の伝統からして当然のことになるわけである。一方、日本には短歌、俳句の伝統があり、こちらは詫びや寂びという西行法師や芭蕉につながる流れがあって、基本的に無常観を歌っている。しかし、日本人は無常観ばかりではない。短歌、俳句の流れと、そして歌謡の流れと生命の燃焼感、これが全体として日本人の歌というものを作っていることを認識する必要があるわけで、西條八十はそれが分かった人だった。後年、大岡信が全く同じことを主張しているが、そういう形で西條八十はこういうものを肯定していたということである。

## X 戦後の「小春日和」から高度成長の時代へ

### (1) 『王将』

さて、段々と日本が復活するに従い、西條八十もその復活の状況に合わせたいろいろな歌を作るが、結局、最後の西條八十の最大のヒット曲になったのが、昭和36年の『王将』という、当時の日本レコード史上最高記録になった歌である。

映画は、自分の名も書くことができない坂田三吉という草履作りの職人が棋士となって、東京の関根名人と戦うというストーリーである。そういう最下層の庶民の持つ意地や度胸といったものを描いている。元来は北条秀司という人の戯曲だが、それを映画化した作品に西條八十が作詞したもので、100万枚を突破したときも驚きだったが、ついに300万枚を突破し、日本レコード史上最高記録になった。

#### 『王将』

吹けば飛ぶよな 将棋の駒に  
賭けた命を 笑わば笑え  
うまれ浪花の なにわ 八百八橋 はつぱくやばし  
月も知ってる 俺らの意気地 おい いきじ

あの手この手の 思案を胸に  
やぶれ長屋で 今年も暮れた  
愚痴も言わずに 女房の小春  
つくる笑顔が いじらしい

あす 明日は東京に 出て行くからは  
なにがなんでも 勝たねばならぬ  
空に灯がつく つうてんかく 通天閣に  
おれの闘志が また燃える

(『西條八十全集 第十巻』)

当時の日本は高度経済成長が始まっていたが、いくら輸出が伸びたり、工場が増えたりしても、やっているのは人間なので、人間を支えることが必要だった。そして、その日本人の高度経済成長を心情的に支えたのが、この歌だということは常識的なものになっている。そのため、高度成長の応援歌と言われ、当時スポーツで活躍した人や、太平洋をヨットで横断した堀江謙一など、皆この曲を聴きながら頑張ったと言う。そういう作品である。

## XI 西條八十の示すもの

昭和45年(1970年)、西條八十は癌がもとで亡くなった。

西條八十という人は、知識人の世界から出発したが、根がとても庶民的な生まれだったので、日本歌謡という伝統を踏まえ、日本の庶民が頑張るときや悲しいとき、そういうときにどういふものを提供していくことが、自分が一番活躍できる場所なのかということをよくわきまえて、この時期の日本人を最も慰め励ました人だと言えると思う。

その点で、これからも我々は西條八十を評価していかなければならないのではないかと考えている。私の話はここまでとさせていただきます。

## 質疑応答

- Q1 若者を戦地に送り出す際、軍歌を作った西城八十の心の葛藤はどうだったのか
- Q2 当時はどのような手順で歌を作っていたのか
- Q3 『青い山脈』に関する感想
- Q4 西條八十は後世にどのようなメッセージを残したのか
- Q5 西條八十の詩人としての素地はどのようにつくられたのか
- Q6 講演内容に補足はないか
- Q7 西條八十が育てた青春抒情歌の時代は再び巡るのか
- Q8 大衆的な芸術が高く評価される時代は来るか

### Q1 若者を戦地に送り出す際、軍歌を作った西條八十の心の葛藤はどうだったのか

その時代、その時代を生きた音楽が西條八十によって作られた経緯を理解することができたが、そのなかで、戦争協力問題があった。科学も光と影、dual use、両面性を持っていると言われるが、芸術もやはり両面性を持っていると言われている。西條八十の戦中の作品を見ると、多くの素晴らしい軍歌を作っているが、その軍歌によって若い人たちを戦地に送り出すことに協力せざるを得なかった西條八十の心の葛藤はどうだったのか。

#### (筒井)

それについては、西條八十が書き残しているものがあるが、基本的に、この時代に戦争協力をしていない詩人や歌人はいない。全員協力している。反対した人がいるようなことを言っている人もいるが、そういうことは調べれば分かることで、表立って反対した人はいない。

それで、西條八十自身が書き残したのを見ると、西條八十は早稲田大学の先生をしていて、学徒出陣で出征することになった学生たちが国旗やいろいろなものを持ってきて「先生、文章を書いてください」というので、自分の立場としては、当時の習いで「武運長久」と書く。そういう形で生徒たち自身が戦場に行くときに、自分としては戦争に賛成ではないとしても、生徒たちのことを考えると、「戦争反対」とは言えないので、最大限「武運長久」という気持ちで、戦争を励ます歌、戦争を肯定する歌を作ったと言っており、結局はそういうことではないだろうか。

「戦争反対」と言えば聞こえは良いが、具体的に言えば、自分の肉親や兄弟が敵に負けることを肯定することになるので、その立場はなかなか普通の人には取りにくい。その普通の庶民と同じ気持ちを西條八十は持っていたと、そのように言えば良いと思う。

### Q2 当時はどのような手順で歌を作っていたのか

当時、歌を作るときは作詞が先だったのか、作曲が先だったのか。

#### (筒井)

西條八十の場合は作詞が先のケースが多い。当時、レコード会社で専属が決まっていたので、コロムビアならコロムビアの作詞家、作曲家が作るようになっていた。そういうことがはっきりしていて、およそこういう曲を作るということになっている場合は、作詞家の方に話が来て、それに合わせて作曲家が作るというケースが多かった。ただ、そうではない場合もあったので、一概には言えないが、そのように考えてもらえば良いと思う。

### Q3 『青い山脈』に関する感想

祖母や父母が『青い山脈』をよく歌っていたので、よく聞いていたが、時代背景をよく知らずに聞いていて、祖母や父母が歌っている姿を見て楽しそうだと思っていた。本日の話を伺って感動した。

### Q4 西條八十は後世にどのようなメッセージを残したのか

昭和45年(1970年)、万博の年に亡くなられたということだが、その万博は「進歩と調和」という人類が一番前向きなメッセージを発信しようとしていたと思う。西條八十は戦後の厳しい状況の中でも「国敗れて山河あり」の山河の部分进行うような、前向きな発想がある方だったと思う。最後はどのような形で、自分の亡き後の世界に向けてメッセージを残したのだろうか。

#### (筒井)

詳しくは参考文献に上げている私の著書に書いてあるが、晩年の西條八十はやや寂しい気持ちだったのではないかと思う。例えば、『東京行進曲』に銀座の柳のことが書いてあるが、西條八十が書いたことで銀座に長らく柳があった。それが1960年代の後半頃になると、排気ガスで枯れてしまうということで廃止になってしまった。

それに代表されるように、広い意味での流行歌の世界で、ジャズやポップスミュージックは戦前からあったが、それまではスローテンポの曲が多かった。それが1950年代後半からロカビリーが現れ、プレスリーが登場して、さらに60年代になるとビートルズが現れて、ロック系の曲が流行するようになった。現代もそうになっている。そうすると、皆が歌う歌はリズムが中心になって、言葉は副次的になっていく。西條八十の時代は言葉が大事で、皆が良い言葉に酔って西條八十の歌を歌うという点があったけれども、それが衰弱してリズム中心の音楽になっていった。特にロックミュージックがその大きな原因である。

そうになると、北原白秋、野口雨情、自分らが作ってきた詩、言葉が中心の皆が歌う歌というのは段々と終わっていくのではないかと、西條八十自身が言っている。もちろん、それは非常に寂しいし、それで良いのだろうかと言っているが、実際は、これからさらに言葉は弱ってリズム中心になっていく。そういう時代になり、その辺りで西條八十の晩年は寂しかったのではないか。しかし、明治の終わり、大正時代～1970年頃まで活躍したわけであり、それで十分だったと言うしかないのではないかと思う。



## Q5 西條八十の詩人としての素地はどのようにつくられたのか

西條八十が詩、歌に関心を持ってこの道を進んだのは、幼少期の体験が大きいと思うが、生まれたときの背景として、何が一番強かったのか。明治、大正、昭和にわたって活躍した、このように素晴らしい詩人ができた素地は、どのようにつくられたのか。

### (筒井)

西條八十が詩人になるにあたっての幼少期、青年期、成人期の体験はどういうものだったかという質問だと思うので、若干、前回の話の繰り返しになる。

一つは、幼少期から、文学少女だった姉の兼子が泉鏡花が好きで、そういう人たちの作品を読んで、西條八十にいつも聞かせてくれたということがある。それで八十は読書に親しむようになり、貸本屋に通って多くの小説を読むようになった。そこで野口雨情の詩に目覚め、詩が好きになったのである。したがって、第一の要因は肉親、この場合は姉になるが、そういう人が言葉に関する文学、小説、歌、そういうものを好きだったということは大きいと思う。その点は今でも変わらないと思うが、身の回りにそういう詩や小説が好きで、一生懸命に語ってくれる人がいるというのは非常に大事なことで、それがなければなかなかそういう風にはならないと思う。

それから、明治37年に早稲田中学に入り、3年生のときに英語の先生として吉江喬松という人が赴任してきたことも要因の一つである。この人は文壇の中心というわけではないが、ある流れの中に属していたので、それまで姉から文学一般について関心を持つような影響を受けていたが、より文壇で密接な関わりを持っている人から、いろいろな話を聞く機会ができたわけである。それも大きいと思う。

つまり、一般的な関心を抱くだけでは次のステップに進めないで、具体的にあるジャンルの中心的な世界の内部事情に通じている人からいろいろと話を聞くことが必要になる。それによって「小説はどのように書くのか」「詩はどのように書くのか」と分かるようになるわけである。それがなければ、距離があり過ぎて、例えば「小説がいいな」と思っても、どのように書いているのか、どのように失敗しているのかが全然分からない。しかし、自分の身近な世界にそういうものの中核部に関わっている人がいると、「このようにするのか」ということが分かって、例えば、失敗したり、上手くいかなかったりしたときに役に立ちやすいという面もある。

これは、あらゆるジャンルでそうだと思う。そういう機会がなければ、自分が興味を持った世界が雲を掴むようなものになってしまう。その点で、やはり吉江喬松先生がいて、そのジャンルの比較的中心部の内部を知り得たことによって、小説ならどのような作品を書けば雑誌に載るのか、どういう編集者が原稿を選んでいるのかなど、そういうことがよく分かったはずである。それが大事だということは言えると思う。

そのあとの段階にもまだいろいろあるが、大きいのは、やはり身近に、そのジャンルについて良さを教えてくれる人がいること、その次はそのジャンルの中核部の動きが分かってどうしたら上手くいくか、どういうところで失敗するかが分かること、これが積み重なるこ

とによって、次のステップに進めるのではないかと思う。

#### Q6 講演内容に補足はないか

講演に何か付け足されることはないか。

(筒井)

付け加えた方が良くと思うのは、「X 戦後の『小春日和』から高度成長の時代へ」の項目について割愛した部分である。

昭和 28 年～36 年の『王将』までの時代を「小春日和」と言い出したのは、恐らく川本三郎氏だと思う。日本は戦争に負けて国中が焼野原になったが、朝鮮の人には大変気の毒ではありながら、朝鮮特需のお陰で、日本はアメリカ軍や国連軍の兵站基地になり、急に景気が良くなってかなり復興した。それから、昭和 35～36 年頃には高度経済成長になり、1970 年代始め頃まではモーレツと言われた時代で、急速に日本は世界のビッグな経済国になっていった。戦後の混乱期が終わり、昭和 26～27 年に日本がアメリカ軍の占領から解けて自立して独立国になった頃から高度経済成長の始まるまでの間は、戦後直後の食べるものがないというほど貧しくはないが、高度経済成長の頃ほど、皆が慌ただしく前向いて走っている時代でもない、比較的落ち着いた良い時代だったということで、川本三郎が小春日和の時代と言い始めたと思う。実際、私自身の少年期の体験からしてもそういう感じがある。物凄く貧しいというわけでもないし、慌ただしくもない、そういう時代だった。

その頃に西條八十がどういう作品を作ったかという、美空ひばりと高田浩吉の 2 人の作品が非常に多い。例えば、美空ひばりでは昭和 30 年に『娘船頭さん』、昭和 32 年に『江戸の闇太郎』、昭和 33 年に『江戸っ子寿司』などを作っている。高田浩吉では昭和 30 年の『白鷺三味線』、少し戻って戦後の小春日和から高度成長時代の少し前に『伊豆の佐太郎』を作った。要するに、いろいろな可能性があったが、基本的に『娘船頭さん』や『江戸の闇太郎』『江戸っ子寿司』のような、やや古い江戸時代や日本が農村的な生活をまだしていた時代に一般の人から好まれたような作品を作っている。『白鷺三味線』も『伊豆の佐太郎』も、当然、江戸時代を描いた作品である。高度成長で段々と失われてしまうような、江戸だったり地方だったり郷愁に満ちた、日本の古い時代を懐かしむと言うか、愛おしむと言うか、そういう作品が多かったのが特色だと思う。

『王将』は昭和 36 年に大ヒットしたが、前述のように、この頃はロカビリーというロック調の歌が若い人に大変受けていて、このままではそういう歌ばかりになってしまうと思われた。そうではない、もっと前の日本の庶民の気持ちを歌ったような歌を作って流行らせたいという、そういう気持ちで『王将』という歌を作っている。

しかし、結局はこの後、高度成長が終わると、ほぼこの種の曲は作られなくなっていく。現在、演歌と言われるジャンルは CD 売り上げの全体に占める割合が 5%以下と言われていて、小春日和の時代は 8 割～9 割が演歌で、外国のものは 1 割～2 割くらいだったと思うが、そういう形で、小春日和の時代に江戸期や農村的なものを中心とした文化の作品を作っ

て、そういう時代が段々と消えていくことを郷愁をもって見つめていたというような感じで、この時代の西條八十の作品を見ることができると思う。全体としては、実のところ、この種の大衆向きの文化の果たす役割もそういうものだと言えらると思う。結局は段々と消えていく文化を哀悼しながら慈しんでいく、そういうものだと受け止めたら良いのではないかと考えている。

## Q7 西條八十が育てた青春抒情歌の時代は再び巡るのか

西條八十は『花咲く乙女たち』を作詞し、その後「絶唱」を作詞するが、『花咲く乙女たち』はテンポの速い歌で、『絶唱』はゆっくりとした曲である。西條八十は最終的に青春抒情歌を作ったと書かれているが、確かに、そこから後は加山雄三やグループサウンズなど、テンポの速い歌に変わっていった。今はカラオケブームが続いているが、改めて巷では、カラオケに代わって、私たちが青年の頃の「ともしび」とか歌声喫茶などが流行りつつあると聞いている。

そうであれば、西條八十が生まれてからずっと流れてきた流行り歌、演歌などが一つの区切りにきて、再び戦後の青春抒情歌のような、西條八十が最終的に培った頃の歌が歌えるような節目を迎えているのではないかという気がする。今のそのような流れについて、生きる文化というものの大きな転換点を迎えているのかどうか、伺いたい。

### (筒井)

迂闊にして、現在、歌声喫茶などが流行りつつあることを知らなかった。私自身は大学の教師をしているので若い人と接することが多いのだが、残念ながら、今話されたような流れは感じない。つまり、今の若い人たちはAKB48とかは皆知っているが、本日紹介したような曲は知らない。私が教えると「先生、なかなかいいですね」と言うが、ほとんど聴く機会がない。テレビなどで流れている歌もそういうものばかりなので、言われたような感じになると嬉しいと私も思うが、簡単にはそういう方向にいかないのではないかという気がする。

『花咲く乙女たち』は西條八十が作詞し、舟木一夫が歌ってヒットしたが、これはブルースタの小説のタイトルをそのまま八十が取ったもので、歌詞も「咲いて散る」とかあまり明るくない。舟木一夫の曲というのは、後から振り返るとそのような印象がある。

西條八十が日本の青春歌謡を事実上作り出したが、1960年代に舟木一夫が現れて、最初にヒットさせた『高校三年生』という歌は丘灯至夫という西條八十の直弟子の作詞だった。丘は『東京のバスガール』等を作った人だが、福島県出身で、西條八十のお陰で作詞家になった人である。それで、舟木一夫の『高校三年生』が流行してから、西條八十の方が先生なので、西條八十の方でも作ってはどうかということになって『花咲く乙女たち』『絶唱』『夕笛』の3曲を作り、いずれもヒットした。舟木自身も自覚があったらしいが、日本の青春歌謡的なものを自分が最後に燃え尽くすように頑張るという気持ちで詞を作ったようである。ご存知だと思うが、流れは暗い方向に行き過ぎてしまい、本当に青春歌謡は舟木一夫とともに消えてしまうことになった。これも運命だが、自分自身で自覚していたような感じ

がある。

西條八十にも舟木一夫にも、自分らが最後のこの種の歌の継承者という意識があったようで、西條八十は持っていた大事な詩をすべて舟木一夫に渡しており、それは今、舟木一夫が持っているようだ。私も機会があったら一度お会いして、どういうものか聞きたいと思っているが、残念ながらなかなか機会がない。

舟木は一時期いるかいないかわからない状態になっていたが、80年代後半から復活した。一時はもう少し流行り曲を作りたいと思っていたが、自分でそれはできないと分かり、結局、1960年代頃に青春期を迎えて自分の歌をいつまでも愛好してくれる人たちのためにも一生歌い続けると決心し、毎年コンサートも開いて一種の流行が続いているようである。忙しいものだからなかなかお会いできないが、機会があればお会いして、西條八十からどのような詩をもらったのか、聞いてみたいと思っている。

## Q8 大衆的な芸術が高く評価される時代は来るか

『青い山脈』は素晴らしい歌だと思うが、実は私はカラオケが世の中に全くない頃に開発し、市場に出すと爆発的に売れた。そういう中で、100年後まで残るような歌ができないかと期待している。ボブ・ディランがノーベル文学賞を受賞したが、こういう時代がやがて来るのではないかと思う。そうするとカラオケがもっと出ると思うが、どう思われるか。

### (筒井)

私はボブ・ディランがノーベル賞を受賞したときに、西條八十も長生きしていたらノーベル賞をもらったかもしれないと思った。それは私の本にも書いたが、西條八十の生きていた時代は、純文学、純粋芸術と大衆的な芸術、あるいはその種の娯楽的作品との間に物凄い距離があったために、西條八十の作品は低く評価される結果に終わってしまったからである。

現在、日本には芥川賞と直木賞があるが、純粋な文学、純粋芸術と大衆向きの芸術という区分は元来なかった。それが大正時代の後半頃から、大衆小説や大衆向きの映画が大流行するに従い、「自分たちが純粋芸術だ」と考えている人たちが大いに危機意識を持った。簡単に言うと、どのようなジャンルでもそうだが、純粋芸術というのは食べていけない。それに対して、大衆芸術は一般の人に受けるので、例えば原稿料がたくさん入るし、レコードが売れると印税がたくさん入る。したがって、放っておくと大衆的なものに席卷されて、自分たちは消滅するのではないかという危機意識を抱き、純粋芸術、純文学というものを作り出して、大衆的なものを差別し始めたのである。それが段々強化されて、芥川賞や直木賞という、元々はなかったものができたわけである。

高級な芸術とされるのは純粋な小説だが、そういうものは概ね売れない。それがアカデミズムと結びついて、高級なものとして確立していく。それに並行して、大衆に受けるものは流行るので収入も多いが、そういうものは一段低いものだという位置づけが与えられていく。その仕組みが完成していくプロセスと、西條八十が受けた低評価のプロセスはほぼ並行して進んでいったのである。そして、純粋芸術の人は、日本では文化勲章のようなものをも

らえるが、大衆向けのものはそうでない。お金はたくさん入るが、高い評価は受けないという、そういうプロセスが進行すれば進行するほど、西條八十のような人は大変に差別を受けたわけである。

どこが転換点になるかは難しいが、ある段階が過ぎると、段々と純粋芸術と大衆芸術があるのではなくて、良い芸術作品と悪い芸術作品があるのだという評価に変わっていくときが来るのではないか。そして、これまで大衆芸術と言われて一段低く見られていたものにも良いものがたくさんあるという意識転換がなされると、今回のボブ・ディランのノーベル賞受賞のような評価がされるようになるだろうと期待している。

もちろん西條八十がそのような賞を受賞することは物理的に不可能だが、もっと 50 年先まで生きていたら貰えることになったかもしれないと思う。私はそういう意味で、純粋芸術と言われる人たちが自分たちを守るために大衆芸術を差別してきた時期に、西條八十がいたために、彼は悲劇の人になったという点でかなり同情すべきではないかと考えている。

発行日	2023年3月15日
講演著者	筒井 清忠
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ 大仲佐代子

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲート」の胸像  
(国際高等研究所庭園)